

特集 ヴァナキュラー・ツーリズムからみる南アジア
——宗教・聖地・観光——

安田 慎*

Special Issue “Vernacular Tourism in South Asia:
Religion, Sacred Places, and Tourism”

YASUDA Shin

In an era of accelerating global mobility for goods, people, and information, local communities have undergone significant transformation. Global trade and transportation networks have established diverse global supply chains, leading to the worldwide circulation of goods and the transformation of relationships between goods, people, and society. In mobility studies, tourism is an optimal phenomenon for understanding the characteristics and societal implications of global mobility. While tourism is believed to assimilate localities into the global system, cultural anthropologists have argued otherwise. They contend that tourism’s globalization does not homogenize the world; but rather enhances the diversity of localities within the global context. In this sense, this special issue considers contemporary ways of tourism mobility, using the term “vernacular tourism” to discuss the existence of localities shaped by global tourism experiences. Vernacular tourism encompasses both the manifestation of region-specific norms in international tourism and localized practices visible within the global tourism market. Particularly evident in South Asia through pilgrimage practices and sacred sites, this concept emphasizes the manifestation of vernacular elements influenced by the entry of global tourism systems into South Asian societies.

I. グローバル化のなかのモビリティと地域社会

モノやヒト、情報のモビリティが加速していくグローバル化と呼ばれる現象のなかで、地域社会はさまざまな変容を経験してきた。

世界的な貿易網や交通ネットワークが確立する過程で、多様な産業においてグローバル・サプライチェーンが確立し、多様なモノが世界各地をめぐるようになってきている [アーリ 2015]。国際的なモノの移動にともなって大量生産・大量消費や物質文化・消費文化の隆盛という形で、モノと人・社会との関わり方も大きく変貌している [アーリ 2015; ニツ山 2021]。あるいは、世界的な情報網の拡大を通じて、物理的空間を問わずにコミュニケーションを行うことが可能になる環境下で、地域固有の価値規範・行動様式も岐路に立たされてきた [千葉 2021]。さらに、ヒトのモビリティもまた、グローバル化を示す格好の事例のひとつとして捉えられてきた [アパデュライ 2004; アーリ 2015]。世界的に広がる観光客や移民・難民をはじめとする国境を越えたヒトの動きは、従来の地理的空間の捉え方に変容を迫るものとして捉えることが可能であろう [望月 2023]。

上述のグローバルなモビリティの加速を踏まえて、従来の空間や静態的な価値規範体系に規定されてきた地域やコミュニティといった概念を捉え直そうとする研究が広がりを見せている [Scheller and Urry 2006; アーリ 2015; 遠藤 2017; 須藤・遠藤 2018; 吉原 2022]。これらの研究では、

* 高崎経済大学地域政策学部准教授

人や社会のモビリティ (mobilities) をベースにした人文・社会科学の諸理論や概念を構築することを提唱している点で、従来の定住 (residence) を前提にした議論との違いを強調する。

モビリティ研究のなかでも、ツーリズム (あるいはツーリズム・モビリティーズ) と呼ばれる事象は、モビリティのグローバル化をめぐる特徴や社会的意義を捉えるのに最適な現象として考えられてきた [アーリ 2015; 遠藤 2017]。遠藤英樹や他の観光研究者が指摘するように、観光はグローバルなモビリティを産業化・組織化することで、世界中のあらゆるものを結びつけていく [遠藤 2017, 2022: 36; 須藤・遠藤 2018]。それゆえ、グローバル化したモビリティを考えることは、現代社会そのもの考えることにも通ずるのだ。

グローバルなモビリティを産業化・組織化するツーリズムは、世界各地に点在してきたローカリティ (locality) を世界的なシステムのなかに飲み込んでいく原動力ともなっていく [須藤・遠藤 2018: 32]。それゆえ、各地域社会のなかに埋め込まれた価値規範体系や行動様式は、ツーリズムを通じてグローバルなシステムに統合され、消失していくものとして捉えられてきた [ナッシュ 2018(1979)]。

しかし、現実には上述の内容とは異なった様相を呈するようになっていく。ツーリズムによってもたらされるグローバル化という現象は、世界を画一化して統一的な価値規範・行動様式を広めていくことよりも、そのなかでの多様なローカリティを隆盛させていくことにある [太田 1993; アパデュライ 2004; 橋本 2018; サンド 2021]。太田好信が論じるように、観光を通じて地域に生きる人びとが自らの文化を客観的に外部に語るようになる過程で、自らの文化や価値規範体系を再定式化していくのだ [太田 1993: 391]。

しかしながら、グローバルなツーリズムを通じて体现されるローカリティとは、それまで地域社会のなかに埋め込まれてきた固有の価値規範体系・行動様式の集積としてのローカリティとは異なるものである [アパデュライ 2004; 橋本 2018; サンド 2021]。アルジュン・アパデュライが指摘するように、ここでのローカリティとは、「何よりもまず関係的なコンテクスト的なものであって、スケールに関わるものでも、空間的なものでもない」 [アパデュライ 2004: 318]。あるいは、「社会的直接性 = 非媒介性の感覚、相互行為の技法、コンテクストの相対性が連続的に結びつくことによって構成されており、ある種のエージェンシー (行為性) や社会性、再生産性のうちに表出するもの」として捉えられている [橋本 2018: 19]。それゆえ、ローカリティは地縁・血縁といった属性で結びつくのではなく、「社会的・空間的に境界を定められた『地域』を身体に刻み込むことを容認した者」 [橋本 2018: 19] たちの経験の蓄積のなかで社会的に承認されたものなのである。

グローバルなツーリズムに映し出されることによって生み出されてきたローカリティの存在は、従来の観光研究のなかでは等閑視されてきたと言える。従来の観光研究では、ツーリズムを地域による差異が存在しない単一的・画一的な理論やモデルで語ることで存在として体系化してきた [Goeldner & Ritchie 2011]。そこでは、統一的な理論やモデル、基準のもとでツーリズムを語っていく過程で、地域固有の文脈を捨象してきたと言える。しかしこれまで論じてきた通り、ツーリズム・モビリティーズこそがまさに現代社会におけるヴァナキュラーなローカリティを生み出す原動力となっている。

本特集論文では、グローバルなツーリズムにおける諸システムや制度環境での経験を通じて生み出されていくローカリティの存在やツーリズムの在り方を、「ヴァナキュラー・ツーリズム (vernacular tourism)」という呼称を用いることで、議論を展開していきたい。

II. ヴァナキュラー・ツーリズムとは何か

ヴァナキュラー・ツーリズム(vernacular tourism)という呼称については、これまでの観光研究や隣接分野において必ずしも使われてきた概念ではない。一部の研究において萌芽的な議論が提示されているが[De Bres 1996]、必ずしも体系的な概念としては提示されてこなかった。むしろ従来の研究では、地域固有の観光資源への旅行に対して、「ヴァナキュラー・ツーリズム」という語を当ててきた[De Bres 1996]。

グローバル化の対極として位置付けられてきたが、ヴァナキュラーという語はむしろグローバル化のなかで隆盛するローカルな事象を捉えるひとつの必要なキー概念として発展している[サンド2021]。ヴァナキュラー(vernacular)という語自体は建築学や文学、美術、民俗学の分野で使用されてきた概念であり、グローバルな広がりを持つ近代社会とは対比的に意味を含ませた、「土着の」、「その土地固有の」、「日常的な話し言葉の」といった意味を含意している。

文化人類学者の今福龍太は、ヴァナキュラーを「ある地域やあるひとびとやある時代に散見されるが、しかし、伝統や規範の本質性や純粋性、地域的完結性からつねにずれて移動していくような、文化的特質や営為の方向性をとらえるための概念」[今福1991: 158]として捉える。あるいは、「デザインや技術の実践にかんして日常生活に基礎をおいた特定の『文化パターン』との関連が認められるとき、それらはヴァナキュラーと呼ばれるのである」[今福2003: 170]と語っている。島村恭則も、支配的なものや制度的なものとは異なった領域で位置づけられているものとしてヴァナキュラーの概念を捉える[島村2018: 32]。そこでは、「ある言説や対象が特定集団の局地的かつ非公式的な期待を満たす時に、それはヴァナキュラーと称されることになる」[Howard 2008: 203; 丁2022: 23]。

研究者たちはヴァナキュラーという概念を通じて、個人や社会に埋め込まれてきた固有の価値規範体系や行動様式のあり様を描き出そうとしている。ジョルダン・サンドは『東京ヴァナキュラー』のなかで、東京という都市空間が「固定された伝統というより、生成し続ける文法として、ヴァナキュラーは現代の建物および大衆文化の産物を組み込んでいく」点を指摘する[サンド2021: 4]。人びとは空間において「身体と感覚の次元で掴みとれるような人間存在の刻印」を追い求め、国家やグローバルな事象とは異なった形で、自らを位置づけ、その経験を語っていく[サンド2021: 5]。むしろそこでは、ティム・エデンサーがインドのタージ・マハルを事例に論じるように、観光者たちが背負う文化的な価値規範や社会規範に応じて、異なった行動様式や空間経験を行っている点と重なり合うものである[Edensor 1997]。

いずれの議論においても、グローバルな社会や国家といった支配的なシステムや制度環境があるなかで、ローカルな文脈で広がるさまざまな事象を捉える概念として、ヴァナキュラーの用語を当てている事例がみられる。それゆえ、ヴァナキュラーな事象はより広範なグローバルな現象を経験するなかで構築される、ひとつの社会的文脈として捉えることができるであろう。実際、グローバルな現象を経験するなかで顕在化してきた、インド各地の人びとの生活におけるローカルな民主主義や政治の在り方について、田辺明生は「ヴァナキュラー・デモクラシー(vernacular democracy)」という語を用いて説明しようとする[田辺2010]。そこでは、従来のカースト制度が周囲を取り巻く社会環境の変化を受容しながら、地域社会におけるミクロな価値規範体系や社会関係が再編されていく様を表現しようとしている。

それゆえ、現代社会においてヴァナキュラーという概念を取って用いてツーリズムを捉えていこうとする視点は、現代社会における二つの新たな視点を提示することになるであろう。一つは、こ

れまでグローバルな事象とローカルな現象を分断して考えるか、もしくは後者が前者に飲み込まれていくとして捉えてきたモデルに対して、多様な相互作用のあり様を示す。もう一つは、その結果として多様な観光実践が地域ごとに現存し、そのなかでヴァナキュラーな価値規範・行動様式が息づいていることを示すことになる。

ヴァナキュラーをめぐる一連の議論を受けたうえで、本論考ではヴァナキュラー・ツーリズムを、「グローバルなツーリズムを通じて生み出されたローカルな観光実践」と定義してみたい。ここでは、(1) 国際観光市場の諸制度やシステムを、地域固有の価値規範・行動様式がローカライズされた結果として表出する観光実践と、(2) 国際観光市場が成立するなかで可視化されてきたローカルな観光実践、という大きく二つの領域で存在する。

前者のグローバルなツーリズムがローカライズされていく点については、観光活動に従事する人びとや、観光者をもつ価値規範体系や行動様式が、観光活動に反映されていく過程で、従来の国際観光市場とは異なった意味を見出していくプロセスにある[安田 2016]。イスラミック・ツーリズムの研究領域に寄せて論じるのであれば、例えばムスリム観光客向けのビーチ・リゾートが世界各地で広がりを見せている点に見出すことができるであろう。ここでは、ブルキニ(burqini)と呼ばれる肌を露出しないビキニや、男女の分離や家族のプライバシーを徹底したビーチのマネジメントを導入することで、西洋社会の社会環境に立脚したりゾート文化を、自分たちの価値規範体系のなかで受容してきた。

後者の顕在化していくローカルな観光実践については、各地における宗教観光の発展に見出すことができるであろう。イスラミック・ツーリズムにおいてもイスラームの巡礼・参詣活動が国際観光市場の諸制度環境や概念を受容しながら隆盛していく姿に、ヴァナキュラーなモビリティ実践がグローバルなシステムと接合していく姿を見出すことができる[安田 2016]。世界各地で組織される宗教ツアーや宗教ツアーを専門とする旅行会社やガイドが社会のなかで重要な役割を果たすようになっていく点からも、ヴァナキュラーなモビリティ文化の在り方を見て取れる。

いずれの領域についても、ヴァナキュラー・ツーリズムとは、グローバルなツーリズムという近代社会が生み出した概念が広がり、世界各地の多様な地域社会との接触経験を生み出す「コンタクト・ゾーン」[田中 2018]のなかで顕在化してきたものである。その点、ヴァナキュラー・ツーリズムとは一見すると地域社会のなかに埋め込まれたローカルなものであるようにみえるが、近代社会を経験した先に存在する、極めて現代的な現象なのである。

III. 南アジアからみるヴァナキュラー・ツーリズム

グローバルなツーリズムとの接触経験を通じて世界各地で生み出されてきたヴァナキュラー・ツーリズムであるが、南アジアではとりわけ巡礼や聖地における諸実践や、宗教がかかわる諸事象において見出すことができる[Fuller 2004(1992); 中谷 2004; Shinde 2010, 2018; Green 2011, 2015]。ナイル・グリーンが19世紀から20世紀にかけてのボンベイ(ムンバイ)の宗教状況を描き出しながら論じるように、南アジアにおいては多様な宗教宗派コミュニティが混在するなかで、常に競争と協調関係が生み出されてきた[Green 2011]。その過程で、域外との多様なネットワークを取り結び、外部の多様なシステムや概念を取り入れながらも、自分たちの社会環境に沿った形で宗教実践を変容させてきた。上述の宗教をめぐる環境下において、巡礼や聖地は人や社会を形作る重要なモビリティ実践として捉えられてきたと言える。

巡礼や聖地におけるローカルなモビリティと観光の関わりについては、南アジア研究におけ

るさまざまな領域で研究がなされるようになってきている [三尾 1998, 2002; Fuller 2004(1992); 中谷 2004; 外川 2009; 前島 2018; Yasuda 2018; 田中 2023]。そのなかでも、ジョン・クリストファー・フラーや中谷哲弥は、インド国内において宗教と観光が交錯していく状況を紹介している [Fuller 2004(1992); 中谷 2004]。そこでは、ヒンドゥー教の聖地への巡礼において、国際観光の諸システムが積極的に活用されている点を見出すことができる。さらに、ジョン・クリストファー・フラーはインドにおける巡礼活動が、観光と結びつくことによってこそ発展してきた点を指摘する [Fuller 2004(1992): 204–205]。

キーラン・シンデはインド国内の聖地において観光産業が浸透する過程で、国際旅行システムを活用した新たな宗教起業家 (religious entrepreneurs) が勃興してきたことを指摘する [Shinde 2010, 2018]。ここでは、宗教起業家たちが創り出す一連の宗教ツアーや商品・サービスが、聖地の景観やマネジメントを変貌させていく様を描き出している。あるいは、田中铁也は外部の多様な主体との関わりを持つ過程で、インドにおけるヒンドゥー教の聖地が公益性を担保しようとしていく姿を描き出していく [田中 2023]。

他方で、南アジアにおける観光産業の発展にともなう巡礼活動の活性化は、聖地におけるさまざまな軋轢も生み出してきた [三尾 1998, 2002; 外川 2009]。ここでは、多種多様な背景をもった人びとが聖地に集うことを可能にする一方で、聖地にむけられる「まなごし」をめぐる競合状態を生み出してきたと言える [Eade and Sallnow 2000(1992)]。巡礼や聖地をとりまく社会環境が観光の発展によって変化するなかで、自らの文化や価値規範のあり様を客体化し、ヴァナキュラーなものを創出していく動きもみられる。例えば外川正彦は、バングラデシュ西部に位置するラロン廟における観光開発と地域の反対運動をめぐる動きを描写するなかで、地域固有の社会的文脈をより強固なものにしていく事例を紹介している [外川 2009]。

これら一連の動きも、グローバルなツーリズムをめぐる諸制度環境やシステムが南アジア社会のなかに入り込むことによって生み出されたものとして捉えることができるであろう。それゆえ、現代社会におけるヴァナキュラーなるものは、繰り返しとなるが、グローバルという接触経験の先に顕在化してきた地域社会の姿として捉えることができるのだ。

IV. 本特集の構成

本論考で論じてきたように、本特集ではヴァナキュラー・ツーリズムという概念を用いて、南アジアの観光現象や近接する領域の一端を紐解いていこうとするものである。本特集論文は、日本学術振興会・基盤研究B「イスラミック・ツーリズムにおける観光経験の宗教資源フローをめぐる実証研究」(21H03719)の内容を基盤に、南アジアにおける宗教や観光を研究対象とする文化人類学・地域研究の研究者たちによる共同研究が発展したものである。本研究では4名の研究者たちが、自身の研究領域から南アジアにおけるヴァナキュラー・ツーリズムの一端を明らかにしようとしている。

小牧論考(「テーマパークにおけるテーマ性のゆらぎとヴァナキュラーなもの——現代インドの事例を中心に」)では、インド・ムンバイ郊外に位置するテーマパーク「イマジカ (Imagica)」を事例に、グローバルな象徴のひとつとして生み出されたテーマパークが、いかにヴァナキュラーなものを包摂していくのかを論じる。そこでは、来訪者たちの便宜を図っていく過程で、彼らの日常生活のなかで培われてきた価値規範体系や行動様式を包摂していく空間利用や消費の在り方が模索されていく。その結果として、開園時にはインドをめぐるヒンドゥー・ナショナリズム的な歴史観・

世界観をテーマにしていたにも関わらず、ヴァナキュラーなものが出出する空間となり、統一感が失われていく状況が見出される。外来のものとしてのテーマパークという概念が、空間消費とマーケティングを通じてむしろヴァナキュラーなものへと変貌していく過程を、フィールドワークを通じた経年変化から見出していく。

安田論考(「モルディブにおける国内観光——グローバルなツーリズムにおけるヴァナキュラーなリゾート文化」)では、モルディブにおける国内観光の発展をみながら、当該社会において分断されてきたツーリズムとイスラームが、ヴァナキュラーな価値規範や行動様式を生み出す場へと変貌していく過程を描き出す。モルディブでは、国際高級リゾート地としての観光開発と地域社会のイスラーム化を同時並行で進めていくなかで、両者を相反する現象として社会のなかで捉える政策を展開してきた。しかし、観光振興のなかで醸成されてきたサステナビリティをめぐる議論のなかで、ホストとしてのモルディブ社会が、ツーリズムの領域においてヴァナキュラーなものを取り込んでいくようになる。その過程で、リゾート文化こそがモルディブ社会のヴァナキュラーな価値規範・行動様式を表現する社会的実践であるとする認識が社会に浸透していく。モルディブ社会における国内観光の発展の一つの帰結として国内観光が生み出されてきた点を、観光省の資料から明らかにする。

飯塚論考(「巡礼実践の観光化と脱観光化——南インドのヒンドゥー教におけるバス巡礼ツアーを事例に」)では、インド南部のタミル・ナドゥ州におけるナヴァグラハ信仰の巡礼を事例に、ヒンドゥー教における巡礼の現代的特徴と、その背後に存在する観光的要素と脱観光的要素について議論を展開している。インドにおいて隆盛する巡礼ツアーでは、観光的要素が多分に入り込んでいく一方で、それらを選択的に排除することによって、自らの巡礼経験の宗教的正当性を確保しようとする動きも隆盛してきた。本論考で示される巡礼ツアーの事例でも、世俗的要素を排除することによって、自らの信仰心や崇敬の深さや示そうとしていると言える。しかし、世俗性を排除している巡礼活動は同時に、グローバルなツーリズムを取り巻く多様な制度環境やシステムを積極的に活用しながら、従来には実現できなかった時間や労力の縮減を達成している。その点、地域社会に埋め込まれた価値規範・行動様式の際たるものであるはずの巡礼活動もまた、グローバルな現象との接触経験を通じて、従来とは異なったヴァナキュラーなものを演出しようとする意図と構図を読み取ることができる。

須永論考(「*The Times of India* 紙デジタルコレクションが記録したスィク教徒の旅——パキスタン・イスラーム共和国におけるグルドワラーの巡礼」)では、北インドで展開されるスィク教徒の巡礼活動をめぐる歴史の変遷を、新聞のアーカイブ資料を紐解きながら明らかにしている。そこでは、1947年のインドとパキスタンの独立にともなって分断された南アジアのスィク教徒のコミュニティと、巡礼活動やマネジメントの変容について議論されていく。パキスタン国内のグルドワラーの多くが独立後に荒廃していく一方で、一部の重要な聖地についてはインドからの巡礼者を受け入れる形で発展してきた点を示す。その際、国境を跨ぐ新たな巡礼やモビリティは、パキスタンとインドの間の政治情勢をはじめとする国際情勢によって左右されながらも関係者たちの努力によって継続してきた点を明らかにしている。さらに、聖地が国家管理となって政治的思惑が展開していくなかで、近年では観光資源として重視されるようになってきている点や、欧米諸国を中心とするディアスポラの存在感が増している点も指摘している。

前半二つの論考(小牧論考・安田論考)が、グローバルなツーリズムが地域固有の価値規範体系と接触していく過程で独自の発展を遂げていく点を示すものである。それに対して、後半二つの論考

(飯塚論考・須永論考)はグローバルなツーリズムをめぐる制度環境やシステムが整備されていく過程で、むしろ既存の巡礼活動や地域固有のモビリティが活性化していく事例を示したものであるといえるであろう。

本特集での議論を通じて、グローバル化のなかで隆盛するヴァナキュラー・ツーリズムの実態や、概念形成をめぐる研究が続いていくことを願ってやまない。

参考文献

- アパデュライ, アルジュン 2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』(門田健一訳)平凡社.
- アーリ, ジョン 2015 『モビリティーズ——移動の社会学』(吉原直樹・伊藤嘉高訳)作品社.
- 今福龍太 1991 『クレオール主義』青土社.
- 2003 『クレオール主義』ちくま学芸文庫.
- 遠藤英樹 2017 『ツーリズム・モビリティーズ——観光と移動の社会理論』ミネルヴァ書房.
- 2022 『「ツーリズム・モビリティの社会理論」を志向する観光学——観光的(ツーリストイック)な社会の学』『立命館地理学』34, pp.33–42.
- 太田好信 1993 「文化の客体化——観光をととした文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4), pp.383–410.
- 須藤廣・遠藤英樹 2018 『観光社会学 2.0——拡がりゆくツーリズム研究』福村出版.
- サンド, ジョルダン 2021 『東京ヴァナキュラー——モニュメントなき都市の歴史と記憶』(池田真歩訳)新曜社.
- 島村恭則 2018 「社会変動・生世界・民俗」『日常と文化』6, pp.27–35.
- 田中鉄也 2023 『揺り動かされるヒンドゥー寺院——現代インドの世俗主義、サティール女神、寺院の公益性』春風社.
- 田中雅一 2018 『誘惑する文化人類学——コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社.
- 田辺明生 2010 『カーストと平等性——インド社会の歴史人類学』東京大学出版会.
- 千葉悠志 2021 「放送メディアとイスラーム——宗教的言説空間の拡大と変容」千葉悠志・安田慎(編)『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク——イスラームのゆくえ』春風社, pp.127–144.
- 丁秀珍 2022 「ヴァナキュラー文化と民俗、民俗学」(金廣植訳)『日常と文化』10, pp.21–36.
- 外川昌彦 2009 『宗教に抗する聖者——ヒンドゥー教とイスラームをめぐる「宗教」概念の再構築』世界思想社.
- 中谷哲弥 2004 「宗教体験と観光——聖地におけるまなごしの交錯」遠藤英樹・堀野正人(編)『「観光のまなごし」の転回』春風社, pp.183–202.
- ナッシュ, デニソン 2018 「帝国主義の一形態としての観光」ヴァレレン・スミス(編)『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』(市野澤潤平・東賢太郎・橋本和也訳)ミネルヴァ書房, pp.47–68.
- 橋本和也 2018 『地域文化観光論——新たな観光学への展望』ナカニシヤ出版.
- ニツ山達朗 2021 「神の言葉を伝えるメディア——クルアーングッズから SNS まで」千葉悠志・安田慎(編)『現代中東における宗教・メディア・ネットワーク——イスラームのゆくえ』春風社, pp.145–163.

- 前島訓子 2018 『遺跡から「聖地」へ——グローバル化を生きる仏教聖地』法蔵館。
- 三尾稔 1998 「ヒンドゥー・ムスリムアイデンティティーをめぐるマイクロポリティクス——インド・ラージャスターン州における聖者廟管理権紛争の事例分析」『人文・社会科学論集』12, pp. 1-47.
- 2002 「聖者廟空間におけるアイデンティティー・ポリティクスの生成とその回避——インド・ラージャスターン州メーワール地方のスーパー的聖者廟の事例」『国立民族学博物館研究報告』26(4), pp.603-662.
- 望月葵 2023 『グローバル課題としての難民再定住——異国にわたったシリア難民の帰属と生存基盤から考える』ナカニシヤ出版。
- 安田慎 2016 『イスラミック・ツーリズムの勃興——宗教の観光資源化』ナカニシヤ出版。
- 吉原直樹 2022 『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために』ミネルヴァ書房。
- De Bres, K. 1996. “Defining Vernacular Tourism,” *Annals of Tourism Research* 23(4), pp. 945-948.
- Eade, J. and M. J. Sallnow. 2000(1992). “Introduction,” in J. Eade and M. J. Sallnow (eds.) *Contesting the Sacred: The Anthropology of Pilgrimage*, University of Illinois Press, pp. 1-29.
- Edensor, T. 1997. *Tourist at the Taj: Performance and Meaning at a Symbolic Site*. London: Routledge.
- Fuller, C. J. 2004. *The Camphor Flame: Popular Hinduism and Society in India* [Revised and Expanded Edition]. Princeton: Princeton University Press.
- Goeldner, C. R. and B. J. R. Ritchie. 2011. *Tourism: Principles, Practices, Philosophies* [Twelfth Edition]. London: Wiley.
- Green, N. 2011. *Bombay Islam: The Religious Economy of the West Indian Ocean, 1840-1915*. Cambridge University Press.
- . 2015. *Terrains of Exchange: Religious Economies of Global Islam*. Oxford University Press.
- Howard, R. G. 2008 “Electronic Hybridity: The Persistent Processes of the Vernacular Web,” *Journal of American Folklore* 121(480), pp. 192-218.
- Shinde, K. A. 2010. “Entrepreneurship and Indigenous Entrepreneurs in Religious Tourism in India,” *International Journal of Tourism Research* 12(5), pp. 523-535.
- . 2018. “Governance and Management of Religious Tourism in India,” *International Journal of Religious Tourism and Pilgrimage* 6(1), pp. 58-71.
- Sheller, M. and J. Urry. 2006. “The New Mobilities Paradigm,” *Environment and Planning A* 38(2), pp. 207-226.
- Yasuda, S. 2018. “Entrepreneurship for Religious Tourism in Mumbai, India,” in S. Yasuda, R. Raj and K. Griffin (eds.), *Religious Tourism in Asia: Tradition and Change through Case Studies and Narratives*. Wallingford UK: CAB International, pp. 21-29.